



新潟大学広報誌

新大広報

Niigata University Campus Magazine

2007年夏号

No.165



OMORI, Go ■ ISHIDA, Minori ■ SAKIYAMA, Kyoichi
SAITO, Masayuki/MATSUZAWA, Kanae ■ YAMAMOTO, Shinya/KANBAYASHI, Yumeko



地域ともしっかりつながろう

かけはし隊が行く

健康コラム

最近増えてきている“こころの風邪”について

shindai NEWS

学務部からのお知らせ

特集1

研究教育 最前線

特集2

にいがた アートの世界へ ようこそ

特集 ① 研究教育最前線

新潟大学では、専門分野を超えた研究や私たちの身近にある題材を使っての教育など、新しい領域を含めた研究・教育システムが整えられています。いずれも研究教育分野の多様性を活かした総合大学ならではのもの。地域との連携も図りながら、新潟大学ならではの魅力的な研究教育の追求がなされています。今回は「研究教育最前線」と題し、特色ある研究・教育についてお話を伺いました。



OMORI, Go



ISHIDA, Minori



SAKIYAMA, Kyoichi

新潟大学では、専門領域を飛び越えたさまざまなプロジェクトが新しい研究に挑戦しています。

超域研究機構 教授 大森 豪

分野領域を超えて研究ができるのは総合大学ならではの

従来、新潟大学を含めて大学の研究方法は、それぞれの学部の中だけでの研究が主体だった。いわゆる縦系列の研究。しかし、研究には専門性の中だけで完結する縦方向の研究もあれば、違う分野の人たちが意見をぶつけ合ってできていく横方向の研究もある。新潟大学では、平成15年に分野横断型研究特化組織「超域研究機構」を設置。分野を超えて研究をしたくてもいろいろな壁があって一步を踏み出せない教員が多い中、もっと風通しを良くして新しい研究ができる場を作ろうというのが設立の趣旨だった。もともと「垣根を越える」という意味のトランスレーションがこの研究体制のキーワード。

領域を超えるという意味で「超域」研究機構という名称になったのだ。超域研究機構の専任教員で整形外科医である大森教授にその意義を伺うと、「医学という領域自体、垣根を越えることが多かった」という。「医者として患者さんを診ることは医学の中で完結していても、研究領域から見ると、身体のことやメンタルのことなど、非常に多領域にわたっている学問の一つです。例えば、私の専門である整形外科の分野では骨や関節を扱いますので、医学的な側面のほかに関節が動く範囲や筋肉の力強さなどの工学的な知識が必要とされます。工学分野である生体工学（バイオメカニクス）といわれる分野が有用なのです」。そういう理由から、大森教授は超域研究機構に携わる以前から工学部の教員と一緒に研究を続けてきた。さらに整形外科医としてスポーツ領域を専門としており、特に子どもの発育や

スポーツ障害についての研究には、教育人間科学部の教員との連携も重要だと話す。教育人間科学部の教員と一緒に「運動の後に筋肉を冷やすことは本当に意味があるかどうか」を調べるために、学生にグラウンドを10周くらい走ってもらい、その後で筋肉の温度を測った。その結果運動後に筋肉を冷やすことが人間の身体にどれくらい良いのかが科学的にわかった。「これは、教育人間科学部の人たちと一緒に調査して初めてわかったことです。医者だけではとてもできませんでした」と大森教授は話す。

超域研究を基にして学外に目を向け産学協同で研究・開発も

新潟大学では超域研究機構を立ち上げる時に、超域研究にふさわしいプロジェクトを学内から広く募集。何人かの教員が集まって新たなプロジェクトを立ち上げたグループや、ある程度の骨格が固まっているプロジェクトをさらに飛躍させようとするグループもあった。超域研究機構という組織があっても、そのための建物があるわけではない。いろいろなところから領域を超えて研究したい人たちが集まり、新しい分野を目指して研究を進めるという形をとっている。

現在選考されているプロジェクトは多岐にわたる。新しい分野の開拓とそれを担う研究者の養成を目指す「創生科学研究部門」と、社会的ニーズに対応した研究（産学連携等）を目指す「社会貢献研究部門」に大きく分けられている。「ただし研究の内容は何でも割り切れるものではありません。創生科学の新しい発見の中に産学協同でやっていかなくてはならないものもあるでしょう。我々が行っている産学協同の研究体でも、新しいものを作ったり解明したりしなければ、もちろん学問としては伸びない。一応部門としては分かれています、内容的には一緒になっている場合が多いと思います」と、大森教授。



2004年から超域研究機構専任教員を務める大森教授

大森教授は工学部の原利昭先生をリーダーとする「地場産業技術融合型先端医療産業クラスター構築」という研究を続けている。この研究は「社会貢献研究部門」に位置。「超域研究機構は学内のいろいろな学部の垣根を取り払って研究する組織であると同時に、学外に目を向けようという組織でもあります。産学協同ですね。原先生が目指すのは、新潟大学の超域研究機構で医学と工学の人たちが集まって研究体を作り、いくつかのプロジェクトを走らせながら、それを基にして学外の企業と一緒に大きな研究体を作る。そこで新しいものを作り、さらにいろいろなことを調べていくということです。新潟大学という地方大学の特殊性を生かし、新潟発の企業と結びついて、地域性を持たせた一つの大きな固まりを作ろうというのがねらいです」と大森教授は語る。「例えば整形外科では、人工関節という、関節が傷んだ時にその部分を金属の部品で置き換える20世紀の医学においても画期的な治療法があります。人工関節は金属部品なので、形や強さ、耐久性について当然医師と工学者が一緒になって研究しなければなりません。そして研究結果を基にして実際に部品をつくって販売するのは企業です。まさに産学協同なのです」。



左：人工膝関節置換術後のレントゲン写真 側面像
右：人工膝関節置換術後のレントゲン写真 正面像

多岐にわたるプロジェクトに 学生が参加することもできる

では、どのように研究は進められているのだろうか。

大森教授は「プロジェクトの大きさや内容によって人数も違い、関わり方もさまざまです。今私が行っている人工関節の研究の場合、コーディネーター（調整役）である私や原先生の下に先頭に立って研究するスタッフが複数いて、その下には大学院の学生がいる。さらに原先生の研究室の、生体工学に興味のある学部学生がいる。学生たちはエネルギーとしてとても重要です。学生にとっては勉強になるし、自分の研究テーマを得る場所にもなるでしょう。縦だけではなく横のつながりの研究があることを知る場にもなるでしょうし、産学協同で企業などとの接点があるかもしれません」という。

最後に大森教授はこれからどのように研究を進めていこうと考えているのか伺った。「私は患者さんを診る臨床の整形外科医として、患者さんに治ってほしいというところから研究を始めています。さまざまな過程を経て、導いてくれた先生方のおかげでこの超域研究機構という場で仕事ができているのです。忘れてはいけないのは、このような研究体制ができるのは新潟大学のパワーだということです。それから僕自身忘れてはいけないのは、自分は一人の医者だということです。人工関節やスポーツのこと、それから高齢者の変形性膝関節症の研究もしていますが、超域研究機構という非常に恵まれた環境で研究させてもらって得たことは、必ず患者さんに返さなくちゃいけない。学問に終わりはありませんが、私個人の目標とし

ては成果を患者さんに返して、格好良く言えば『患者さんの喜ぶ顔が見たい』ことです」。

大森教授はアメリカに留学していた時、散弾銃の暴発で膝の骨が吹き飛んでしまい、人工関節を入れた20歳くらいの女性を診察したことがあったという。当時、人工関節の耐久性はもって10年といわれ、若い人の使用はタブーと言われていた。10年ごとに人工関節を入れ替えなくてはならない人生を背負うことになるからだ。人工関節を入れている若い女性を診て「もっとよい人工関節をつくらなければいけない」と強く思ったと大森教授は語ってくれた。現在の器具の耐久性は当時に比べると飛躍的に良くなったが、人の寿命も延びていることも事実だ。

さらに、大森教授は「次の人たちを育てるということも大切です」と言葉を続けた。「研究をやればやるほど、自分の限界がわかってきます。自分たちの研究を継続していくためには、若い人たちにその研究に興味を持ってもらい研究を継続してもらい、その繰り返しです。新潟大学では超域研究機構という風通しのよい環境で研究ができることを知ってもらい、多くの人に関心を持ってもらうようにすることが必要だと思っています」。

現在31件のプロジェクトが超域研究機構に属して研究を進めている。人文社会、教育科学、自然科学、医歯学、脳研究などが専門分野を超越し、新しい分野を開拓し、現代的課題に関するニーズに応えようとしている。新潟大学という総合大学ならではの新しい挑戦に学内外から注目が集まっている。



1) 正常な膝の骨



2) 老化などにより軟骨が擦り減った状態。痛みをとまう



3) コツの関節部分を切断



4) 大腿骨の関節部分を切断



5) 傷んだ部分を人工関節に置換え。ピンク色の模型は骨、白色の模型は軟骨の人工関節

研究プロジェクト一覧

プロジェクト名称

リーダー

参加部局

■第Ⅰ期選定プロジェクト(平成15～17年度)、平成18年度～

創生科学研究部門	大域的文化システムの再構成に関する資料的研究	関尾 史郎	人文社会・教育科学系、機構専任教員
	メダカをモデルにした脊椎動物の性決定機構に関する総合研究	酒泉 満	自然科学系、機構専任教員
	日本地球掘削科学の拠点形成:海洋底地球科学分野の強化と新領域(地下生物圏)の創成	宮下 純夫	自然科学系、人文社会・教育科学系
	超高分子設計による超酵素機能の人工構築と超機能開拓	青木 俊樹	自然科学系、機構専任教員、人文社会・教育科学系
	一キラルらせん高分子の分子認識機能と電子・磁気機能のナノフュージョンによる超機能の創成		
	ナノエレクトロニクス・デバイス国際研究	金子 双男	自然科学系、機構専任教員
	生体機能と機能関連情報の可視化プロジェクト	宮川 道夫	自然科学系
	発生における細胞機能のダイナミクスとエピジェネティクス	伊藤紀美子	自然科学系
	リアルとバーチャルな運動における感覚刺激が生体と与える影響に関する研究	木竜 徹	自然科学系、歯医学系
	ヒトおよびモデル生物からの「ありふれた病気」への戦略的アプローチ	木南 凌	歯医学系、脳研究所
	先天性骨格疾患における分子病理学的解明と組織機能再建	網塚 憲生	機構専任教員、歯医学系
	水分子の脳科学	中田 力	脳研究所、歯医学系
	脳神経病理学研究教育拠点形成(21世紀COEプログラム)	高橋 均	脳研究所、歯医学系、機構専任教員
社会貢献研究部門	地場産業技術融合型先端医療産業クラスター構築	原 利昭	自然科学系、機構専任教員、歯医学系

■第Ⅱ期選定プロジェクト 平成17年度～

創生科学研究部門	ヒト認知系の統合的研究	本田 仁視	人文社会・教育科学系
	19世紀学研究ーヘレニズムから見た変革と教養の世紀ー	鈴木 佳秀	人文社会・教育科学系、機構専任教員
	プロテオーム発現系の機能工学的研究	内海 利男	自然科学系
	次世代アドホックネットワーク基盤技術研究開発プロジェクト	間瀬 憲一	自然科学系、機構専任教員
	一次元新奇超伝導物質の創製と多重極限下での物性研究	山田 裕	自然科学系、機構専任教員
	成長円錐のプロテオミクスから脳構築と損傷修復の過程を探る	五十嵐道弘	歯医学系、歯医学総合病院、脳研究所
	心の病気の科学	那波 宏之	脳研究所、機構専任、歯医学系
社会貢献研究部門	田園都市における生物多様性回復のためのネットワーク形成	紙谷 智彦	自然科学系
	機能分子解析に基づく代謝性腎疾患のトランスレーショナル・リサーチ	斎藤 亮彦	大学院歯医学総合研究科、歯医学系、歯医学総合病院
	ステロイドに頼らない膠原病の画期的治療法開発ー免疫寛容誘導を目的とする液性・細胞性免疫制御の研究ー	中田 光	歯医学総合病院、歯医学系

■第Ⅲ期選定プロジェクト 平成19年度～

創生科学研究部門	東北アジア地域ネットワークの研究	芳井 研一	人文社会・教育科学系
	「空間」のもつ文化的な意味についての研究	栗原 隆	人文社会・教育科学系
	パターン認識と学習理論の数理的研究	磯貝 英一	自然科学系
	超微量生理活性物質の網羅的な分析による遺伝子の機能解析	児島 清秀	自然科学系
	歯周疾患が全身に与える影響に関する分子基盤解明	山崎 和久	歯医学系、機構専任教員
社会貢献研究部門	超音波によるシリコン結晶中の原子空孔観測と産業技術応用	後藤 輝孝	自然科学系
	次世代照明用発光材料の開発	佐藤 峰夫	自然科学系
	水素エネルギーシステムのインフラ整備に関わる新材料開発	原田 修治	自然科学系

映画を題材にして自分自身の言葉で表現し、さらに映画の中から理論的な問題を探っていく人文学部の石田美紀研究室。石田准教授から映画との関わり方について語っていただきました。

さまざまな映画を見て自分の言葉で話すことは、メディアリテラシーにもつながります。

人文学部 准教授 石田美紀

映画を見て自分の言葉で話すことは自分を発見すること

映画は文学や哲学、絵画などに比べて親しみやすく、わかりやすいメディアの一つ。ところが「見た映画について感想を述べよ」といわれると、あらすじの紹介に終始したり、「泣ける」や「リアルだった」といった紋切り型の答えしかいえなかったりする学生が多い。映像をシャワーのように浴びているはずの学生。しかし映画の感想を表現できないのは、自分の経験や感情を「自分の言葉にして出す」という訓練ができていないからなのではないかと、石田准教授は語る。

石田准教授は、講義の題材に映画を取り入れることによって、学生たちが映像の中で何が起きているかを自分でとらえ、それを自分自身の言葉で話せるようになることを講義の第一のねらいにしている。「映画の研究をしたり批評を書いたりするというよりも、もっと感性のレベルで『自分を知る』ということにつながってくると思います」と、石田准教授。題材とする映画は、映画が誕生した110年ほど昔のものから、『ロード・オブ・ザ・リング』や『スパイダーマン』などの最近のものまで。さらには「学校で取り上げていいの?」と思われるようなものも。例えばホラー映画の『リング』を題材にし、心霊写真や呪いのビデオなどがどのように視覚的に表現され、なぜ怖いのかを話しあうこともある。

「いろいろな映画をたくさん見て、とにかく語る。そのことがメディアリテラシー（メディアを主体的に解読する力）にもつながるのではないだろうか」。さらに「映画を使った講義というと、映画制作ととらえる傾向にあります。しかし、誰も見ない映画作品はいくら良い作品でも存在価値が生まれません。人々がどのように受け取り語ってきたかという歴史が、映画の歴史でもあるし、映像の歴史でもある。そして大衆文化の歴史なのだということを体感してもらう講義になっています」と、映画を題材にする意味を語っていただいた。

プロフィール

人文学部准教授。京都市出身。2007年4月より現職。高校生の時に映画に興味を抱き、以来大学でも映画を研究。京都大学大学院時代にイタリアに留学し、イタリア映画を専門に研究する。現在は日本映画やハリウッド映画を含め、幅広い意味で映画についての研究が続いている。

理論的な問題も追求

学生の思いがけない発見に驚くことも

「見て話すことにプラスして、第二段階としてめざしているのは、映画の理論的な問題を追求することです。どのように映像が学問として語られてきたか。哲学や精神分析、歴史学、芸術学などは、映画を語るうえでの言葉をたくさん持っています。それらと映像経験をリンクさせていきます」。

石田准教授のゼミでは、西部劇（『駅馬車』や『荒野の用心棒』など）を今年の前期のテーマにしている。例えば『荒野の用心棒』の場合、じっくりと作品を見た後、この作品が黒澤明監督の『用心棒』に影響を受けていること、その『用心棒』がアメリカの犯罪小説の大家であ

るダシール・ハメットが書いた小説『血の収穫』にインスピレーションを受けていることなどを語り合い、映像の面白さや格好良さを感じてもらう。そして、なぜ格好良いのかということを考える。さらには、暴力描写などの表現手法がどう変わっていくかを考えていくうちに、歴史的な背景を自然に学ぶことになる。このようにさまざまなことを学生みんなで発見していくのだ。

その中で、石田准教授が思ってもみなかったことを学生が発見することもあるという。「例えば『駅馬車』という西部劇。この映画にはアメリカという国が敵と戦いながら一致団結するというテーマがあります。乗合馬車である駅馬車の中で、最初はギスギスしていた人間関係に、次第に絆が生まれていくという作品です。ある学生が『人間関係がごちゃごちゃしていて、旅から旅へ移動していくので不安定。それは馬車が揺れているから不安定なんですね』と、すごくいい発見をしてくれました。画面の中で起こっていることを全部写しとってやろうというくらいの勢いで見る態度を体得できると、いろいろな発見が出てきます。そしてまた他の学生たちも触発されているような意見が出てくるようになります」。

積極的に映画に関わってほしい 受け入れる土壌が新潟にはある

石田准教授のゼミを受けている文化コミュニケーション履修コースの学生の中には映画への関心が深く、学外でも積極的に映画に関わっている学生も多い。例えば新潟市内にある市民映画館シネ・ウインドのスタッフになっている学生がいる。4年生の一人は、自ら「溝口健二映画祭」を企画。自分の好きな映画を多くの人に見てもらいたいと宣伝も行い、映画祭をやり遂げた。「社会に出てある程度ポジションが決まってしまうと、やりたくても難しくなってしまうことがたくさんあります。学生時代は自分がやりたいと思ったことをどんどんやってほしい。新潟にはそれを受け入れてくれる映画館があることが心強いです」と、石田准教授。「東京に対するコンプレックスはどの地方にもあるでしょう。しかしその気になれば地方だからこそできることもある。特に新潟はそういう思いを受けとめてくれるところだと思います」。

卒業論文のテーマに映画を取り上げる学生はまだ少ない。「映画は勉強するもの」という意識があるのが少し残念と、石田准教授は話す。「映画はある種複雑な、パッケージ化されないところがあります。出演しているスターが格好良いというところから、性描写や残酷描写などの倫理的な問題まで、全てが入ったメディアだということを知ってほしいですね。映画から、例えば漫画へ、ゲームへと、違うメディアへどんどんつながっていく。さらには学生自身がそれぞれ自分の関心でつなげていってほしい。私の講義がその窓口になればいいと思っています」。

自分の原点は「ベルサイユのばら」と話す石田准教授



授業で楽しく映画を学ぶ

人文学部 石田美紀ゼミ 雨宮 由依

中学生の頃から映画を観ることが好きだったので、映画について学ぶことのできるこのゼミを選びました。今は西部劇映画を題材に、映画史や映像分析の手法などを幅広く学んでいます。西部劇は現在ではあまり製作されないジャンルだと思いますが、他のジャンルにも通じる映画の本質が表れています。ただ単にストーリーや映像を見るだけではない映画の楽しみ方を知ることができます。映画に興味のある人なら誰でも楽しむことができ、また専門的な知識も学べるゼミだと思います。



新大における実践映像の実態

映画倶楽部（工学部電気電子工学科） 安部 晃太郎

新大において映像に関する歴史・理論等の知識を身に付けたいのであれば、人文学部情報文化課程や教育人間科学部芸術環境創造課程に所属し然るべき分野を専攻するのが一番でしょう。制作の技術を身に付けたいという場合は、上記の学科の他に映画倶楽部や短編動画制作研究会といったサークルに所属するという手もあります。しかし、そもそも大学の中だけで世界を完結させようということ自体が愚の骨頂です。映像という分野に限って見た場合、新潟は決して弱くはありません。新大の外にも多くの映像系の学校・団体があります。知見を広めるという意味でも、それらの学校・団体に顔を出すというのもあるべき事だと思います。

そして、教育人間科学部の向山恭一研究室でも映画をテーマに研究教育が行われています。
向山准教授から、ゼミのテーマとして映画を取り上げる課題と展望についてお話しいただきました。

映画をつうじて市民社会を読む

教育人間科学部 向山恭一研究室

先生のゼミのテーマは「闘うシネマと市民社会」とのことですが、
映画を教材にされた理由をお聞かせください。

向山●ゼミでの活動はまず共通の問題関心をもつことが条件となります。たがいの議論を深めるためには、やはり同じ土俵を設ける必要があるわけですね。だから、だれもが気軽に共有できるものとして映画を取り上げたのです。ただ私は映画論の専門家ではありませんし、映画をフェティッシュに語り興じる趣味也没有ありません。基本的には面白いかどうかだと思っています。問題はそこから先ですね。ゼミでは現代の市民社会の矛盾を対象としています。そこで、教材となった映画の背景を知るために多くの文献を読み、それらをつうじて映画を観たときの「漠たる思い」を言語化し、自らの「思想」を練り上げることをゼミ生には課しています。要するに「観る楽しみ」と「読むしんどさ」と「書く苦しみ」をとおして、自分の思想を「つくる喜び」を感じてもらいたいわけです。

その作業はこれまで三冊のゼミ論文集として実を結んできたわけですが、そのなかでお感じになったことは何でしょうか。

向山●いつも試行錯誤の繰り返しですね。まず、どの映画を選定するかですが、こちらの期待と学生の要望はすいぶんすれ違います。昨年度のテーマはフェミニズムだったので、米国のセクハラ集団訴訟を扱った『スタンドアップ』を観てもらいました。ただ若い学生には重過ぎる内容だったようです。いろいろと相談したうえ決まったのが『NANA』です(笑)。

どうなるものかと心配しましたが、主人公のひとりがビールを飲むシーンで性の自己決定権が話題になったり、原作のマンガではその同じ人物が付き合っている男性に「味噌汁」だけは私がつくると言っているシーンに、ねじれた母性を発見したりと、議論は白熱して、こちらの不安をいい意味で裏切ってくれました。人生、何でもやってみないと分かりませんね。

『パッチギ!』を見るゼミ生たち



映画鑑賞の後、在日コリアンの問題を語る向山准教授



今年は『パッチギ!』を教材にされたそうですね。課題と展望をお聞かせください。

向山●在日コリアンを主人公とした映画は以前にも取り上げたことがあります(そのときは『GO』でした)。今回また同じテーマに取り組むのは、私自身この映画を15回観て、15回泣いたからです。また観ても泣くでしょう(笑)。「イムジン河」もなかなか問題提起的ですよ。

ともあれ、多くの学生がそうだと思うのですが、マジョリティの側にいる人間にとって社会の矛盾は見えにくいものです。社会というのは、とかくマジョリティ仕様でつくられていますから。私たちがその矛盾に気づかされるのは、やはりマイノリティである〈他者〉と出会うときでしょう。

その意味では、〈他者〉と向き合おうとしない、ナルシスティックな戦争映画ほどひどいものはありません。逆に、『パッチギ!』は在日コリアンというマイノリティの視点から私たちの社会のネガの部分を描き出しています。それはまた今まで聞くことのなかった〈他者〉の声でもあるわけです。問題はその声にどう応答するかなのですが、この辺でゼミ生にも聞いてみましょうか。

石津秀貴(3年)●『パッチギ!』を観て、小・中・高等学校とずっと一緒だった在日コリアンの同級生を思い出しました。彼とは小学生のころは打ち解けていたのに、中学生になるとだんだん自分から孤立していった、なんとなくギクシャクするようになってしまいました。その当時の彼の葛藤のなかに民族問題もあったのかなと思うと、この映画で自分がようやくそれに気づいたことに、今はただ動揺しています。

佐久間由貴さん



石津秀貴さん



We ♥ movie!

佐久間由貴(3年)●わたしは韓国映画が好きで、ハングルも少し勉強したのですが、『JSA』や『シルミド』といった映画でとりあげられた南北分断の歴史が、日本の在日社会にも大きな影響を及ぼしていることに驚きました。また『パッチギ!』のなかで流れる「イムジン河」も印象的でした。朝鮮半島の統一を歌ったものですが、日本と半島、日本とアジアにもあてはまるものだと感じています。

向山●同じ映画でも人それぞれ受け取り方は異なります。みなさんが映画を観て感じた動揺(それは反発と共感を揺れ動くものでしょう)を自己分析し、そして映画のなかの〈他者〉の声に自分ならどう応答するのかを言語化し、肯定的であれ否定的であれ、自分なりの「思想」を紡ぎ出してほしいと思います。



ゼミ論文集。2004年度は「＜在日＞映画から考える共生の原理」、
2005年度は「マイケル・ムーアを読む」、
2006年度は「ジェンダー論として『NANA』を読む」をテーマとしている。

ART

にいがた アートの世界へ ようこそ

豊かな自然に包まれ四季折々の美しさを満喫できるまち・新潟市は、多くのアーティストの活動を支える、芸術を愛するまちでもあります。人々はアートを通してふれあいながら新しい可能性を追求。その輪の中に新潟大学の学生も参加し、積極的に活動を行っています。今回は、新潟・市民映画館シネ・ウインドとうちのDEアートの活動を紹介します。

新潟・市民映画館シネ・ウインド

うちのDEアート

誰もが関われる市民映画館

新潟・市民映画館シネ・ウインド ◎ 代 表 齋 藤 正 行 さん

新潟市内でも特に若者が集まる街・万代シテイに、新潟・市民映画館シネ・ウインドがあります。ここでは大型映画館では上映されないような隠れた名画や企画者こだわりの作品などを次々に上映。映画を見て楽しむだけでなく、さまざまな活動を通して映画と関われるシネ・ウインドには、新潟大学の学生の会員も少なくありません。映画館誕生のいきさつや活動内容について、シネ・ウインド代表の齋藤正行さんにお話を伺いました。

齋藤さんが感じる映画の「面白さ」とはなんでしょうか。

齋藤 ● 35ミリフィルムを1秒間に16コマの速さで見せること。さらにフィルムをカットして編集すると思いがけないストーリーが生まれるところですね。編集することによって、時間と空間を一気にリアルに飛べる。映画以外

の文学や美術などでも表現はできますが、時間と空間を総合的に表現できるのが映画だと思います。例えば花が咲いているカット。次のカットで枯れていたら、見ている側はその間に何があったのかを想像します。イメージの参加をすることになるわけです。

新潟・市民映画館シネ・ウインドを始めたきっかけをお話いただけますでしょうか。やはり映画がお好きだったのですか。

シネ・ウインドは、新潟伊勢丹向かいの万代シテイ第2駐車場ビルに入ってます。



シネ・ウインド発
文化フォーラムマガジン
「月刊ウインド」

齋藤 ● 映画が特別に好きだったわけではありません。確かに高校時代はその頃「名画座」といわれていた「ライフ」という映画館に通ったりしていて、映画は日常の一部でした。しかしそれは特別なことではなく、当時の高校生はみんなそうでした。

その「ライフ」が1985年に閉館することになった時、映画評論家の萩昌弘さんが「新潟にそういう映画館を維持できないのは貧弱な町だから」というような話をされました。私は、新潟はいい町だからここで死のうと思って女房と子どもを連れて帰ってきていたのです。なんだか新潟を馬鹿にされたような気がしました。

映画館「ライフ」をご自分で運営したいと考えたのですか。

齋藤 ● 「ライフ」の経営者に会いたくても、全く会ってくれませんでした。いろいろ調べてみると、自分が思っていた名画座「ライフ」と現実の映画館「ライフ」は違うのだということがわかりました。

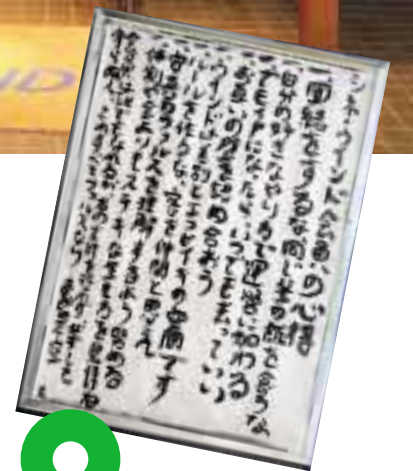
それがシネ・ウインドをスタートさせるきっかけになったのですか。

齋藤 ● その頃、ビデオデッキの普及やレンタルビデオ店の進出などの影響で、全国に7,000館あった映画館が1,500館ぐらいに減っ

ていました。そこで、たとえ儲からなくても、良い映画を上映できる映画館をつくりたいと思いました。どんな方法ができるか勉強し、その頃イギリスから出てきたNPOという活動方法も参考にして、自分の考えた案を持って県や市に相談に行きました。しかし、誰も理解してくれない。「前例がないとできない」「そんなにやりたいならイギリスに行ってやればいいじゃないか」と言われる始末。「これは自分でやるしかないな」と覚悟を決めて、勤めていた印刷会社に辞表を出して、1985年5月に事務所を開きました。

どんな映画館にしたいとお考えに。

齋藤 ● 「市民映画館」にしたいということは絶対に譲らなかった。誰もがフィルムをまわして、誰もがお客さんになって、誰もが作品を組めて、誰もが関われる映画館。これは表のポスターに学生が書いてくれた言葉です。この形態は現在も変わっていません。シネ・ウインドを始める時はずいぶん怪訝そうに見られました。当初、「営利目的でない、そんな



シネ・ウインド会員の心得
これも学生ボランティアの
手によるもの

映画館はありえない」「みんなが参加するなんてどうやって?」といわれました。しかし、それまで見たことがないわけだから仕方がない。そんな中で映画について勉強をし、疑問に思ったことは一生懸命考えて、オープンにこぎつけました。市民映画館の前例はないけれど、それでも人が集まってくる。「安全・安心」とよく言いますが、人間は危険で不安なほうが楽しいのかもしれない。生きるということはそういうことで、そうやって楽しむしかないのかなと思いますね(笑)。

シネ・ウインドには核(リーダー)がたくさんいる、と語るシネ・ウインド代表の齋藤さん

シネ・ウインドには多くの新潟大学の学生も関わっていますが、具体的にどういう参加のしかたをしているのでしょうか。

齋藤●映画を上映したいと思って来る人もいれば、見に来る人もいれば、手伝いに来る人もいます。自分がやってみたい、関わりたいということをする。シネ・ウインドとの関わり方は自由です。ずっと関わっている学生もいれば、一つのことに関わって去っていく学生もいます。作家の中上健次さんに、「おまえのところは単純細胞の寄せ集めで、中心（核）のないアメーバ運動をやっているんだなあ」なんていわれました（笑）。「齋藤って誰ですか?」と、代表をしている私を知らないシネ・ウインド会員だっている。だから、「シネ・ウインドは好きなんですけど、あの齋藤が嫌だよな」というのもOK! なんです。どういう人がどう関わっているかは関係ない。自分のやりたいことをやればいい。

シネ・ウインドの建物の外側に、ベルリンの壁の崩壊をきっかけにして壁をつくりました。この壁には隙間があります。これはシネ・ウインドの象徴のようなもの。壁はあるけど隙間から希求すれば、全てに応じようという場所。それがシネ・ウインドです。そして、人と人の間には見えない壁があるということを認め合うことが大切だと思います。そういう意味でつくった壁です。



シネ・ウインドの「隙間のある壁」

シネ・ウインドが将来目指している展望を教えてください。

齋藤●まだ道半ばですからね。今から22年前、シネ・ウインドのオープニング・パーティの時にだるまが用意されていました。だるまの「両目を開ける」といわれて、私が「半世紀後に開眼しようと思う」といったら、みんなに笑われました。オープンするといっても3日もつか

3カ月もつかもわからないのに、なにを言っているんだって（笑）。全てについていえることは、1年で結果なんか出ないし、もし結果が出たとしても面白くないということ。あの22年前に比べると周りの見方も変わってきているのは事実です。もう一度原点に帰って再発見することも大事だと思っています。

学生に



新潟・市民映画館シネ・ウインド

人文学部4年 松沢佳苗（長野県上田市出身）

新潟大学に入学し新潟市に住むようになって、シネ・ウインドの存在は知っていましたが、直接関わるようになったのは最近のことです。国際協力に興味があって、ボリビア映画の特集があるからと知人に声をかけられて見にきたのがシネ・ウインド初体験。その後、『蟻の兵隊』を見たのがきっかけで会員になりました。去年のことです。齋藤さんに初めて会った時の印象は、面白いおじさん。でもすごく影響を受けています。

シネ・ウインドでの活動のしかたは自由です。私も頻繁に来ているわけではありませんが、この場所に来れば自分なりの関わり方ができます。友達から「シネ・ウインドでボランティアをやりたいので紹介して」といわれることがありますが、「とにかくこの場所に来てみて」と話しますね。それが市民映画館シネ・ウインドだと思います。

新潟・市民映画館シネ・ウインド

1985年12月にオープンした新潟独自の「市民映画館」。運営は会員の手により行われており、会報『月刊ウインド』の編集や上映作品の選定、各種資料の保管・管理などに多くの会員有志が精力的に活動している。

新潟市中央区八千代2-1-1
万代シテイ第2駐車場ビル1階
TEL025-243-5530
<http://www.wingz.co.jp/cinewind/>

特集2
ART
にいた
アート
の世界
へよう
こそ

学生と住民が作り上げるアートプロジェクト

うちのDEアート ◎ 教育人間科学部 教授 山本 眞也 ◎ 大学院教育学研究科 2年 上林 夢子

うちのDEアートは、新潟市内野町を舞台に2001年、2003年、2005年と、3回にわたり行われてきたアートプロジェクト。

芸術の新たな可能性の模索と地域の活性化を図ることを目的に開催。新潟大学の学生と内野町住民が中心となり、長期的に町の中で交流をもちながら活動してきました。アートを媒体にした人と人とのつながりは、回を重ねるごとに広がりを見せています。

そして、新潟市が政令指定都市に移行した今年の秋は、エリアを内野町から西区へと広げた「西区DEアート」に。地域の枠を越え、新しいつながりに結びつくアートプロジェクトを展開します。



アートプロジェクトの舞台として、なぜ内野町が選ばれたのでしょうか。

山本●まず内野は大学に隣接する町なのでフットワークよく動けるというのがありました。それから内野が持っている町の魅力ですね。内野には新川や港があり、2003年には造り酒屋が4軒もあったという伝統の残る町です。学生からもっと内野の町を知りたいという声が上がリ、開催地に決まりました。

学生は何名くらい参加していますか。また、実際にはどのような活動を行うのですか。

上林●2005年の3回目は約100名の学生が参加しました。活動としては、まず開催前年の10月、実行委員会を立ち上げます。それが

ら招聘する外部アーティストの人選をしてアポイントをとり始めます。同時進行で文化活動に対してお金を出してくださる助成団体を探し、助成金の申請作業を始めます。また、内野町住民によって結成された『夢アートうちの』の方々と会議も行っていきます。そういう活動をしなが、学生たちは自分の作品の企画を進め、2月から4月初頭にかけて企画の選考会を行います。プロのアーティストの作品と一緒に展示する以上は学生もプロの意識で作品を発表しようということで、2005年は新潟美術館や万代島美術館、県立近代美術館の学芸員の方々を外部審査員としてお招きし、いろいろなお意見をいただきました。



内野駅前に建つ「Lotulilo=Meditation（瞑想）」

Lotulilo=Meditation

海外のアーティストも招聘されているそうですね。

山本●「アーティスト・イン・レジデンス」といって、海外から招いた作家が地域に滞在し、地域の人と交流しながら公開制作をするという企画です。2003年はニュージーランドの彫刻家を、2005年はイタリアの彫刻家をお呼びしました。イタリアの作家の方は新川脇の公園で制作していたのですが、毎日のように町の人たちや小学生たちが見に来て賑やかでした。その時制作した2作品は、1点は内野小学校の校庭とグラウンドの間にあるパブリック・スペースに、もう1点は小学校のグラウンドに設置されています。

上林●グラウンドに設置された『Friendship』という作品は、子どもたちとずっと触れ合いたいと作家自身が言い出して制作したものです。内野小学校の子どもの手型を取って石に彫っています。

山本●町の人たちが制作風景を見たり、作家と交流したりすることで、うちのDEアートに対する住民の見方がずいぶん変わりました。もちろん学生たちにとってもすごく勉強になっていると思います。



内野小学校の児童たちの手形が刻まれた『Friendship』

Friendship

活動している中で、嬉しかった出来事を一つ教えてください。

上林●うちのDEアートがある年もない年も私たちは内野のお祭りに参加させてもらっています。お祭りで町のみなさんと知り合うことができました。そこで出会ったおじさんたちは、普段はアートなんて興味を示さないのに、このプロジェクトで私が作品を出していると聞いてわざわざ仕事の途中に「見に来たよ」って寄ってくれたんです。これは嬉しかったですね。

それでは、苦勞されるのはどういう点でしょう？

山本●内野の町には空き店舗や空き家が結構多いのですが、そういう場所を企画の会場として使いたいと交渉すると難色を示さ

西区DEアート副実行委員長の山本教授



『Meeting Point』は内野小学校のグラウンド近くに設置されている

学生実行委員長の上林さん

にかけてもらうという企画です。開催期間中は何十もの暖簾が軒先に並んで圧巻でした。すると、それを見ていた町の人から「次はうちの暖簾を作ってくれるんだよね」と言われたそうです。これを企画した学生は卒業したのですが、私は継続プロジェクトにするのも面白いと思っています。

今年は「うちのDEアート」から「西区DEアート」に変わるそうですね。

山本●2007年に新潟市が政令指定都市になるということで、アートプロジェクトの範囲を内野から西区にまで広げてできないかというオファーが、新潟市からあったのです。

西区DEアートではどういう企画を予定しているのですか。

上林●今回は寺尾中央公園でのワークショップを企画しています。西区内の小中学校全てに声をかけて、美術教育の研究室の学生が考えたいくつかのワークショップの中でやりたいものがあれば参加していただき、その学校が作りあげた作品を寺尾中央公園に設置します。その他にも浜辺に作品を展示するなど、内野町という枠にはとられない

企画を予定しています。

最後に、西区DEアートへの意気込みをお願いします。

山本●今回は招聘アーティストが13名と多数参加するので、どういう展開をしてくれるのか楽しみです。それから私たち教員も学生を指導するだけではなく、それぞれに今までにない企画を考えたいと思っています。うちのDEアートのこれまでの経験をもとに新しい試みをしていく予定です。期待してください。上林●企画者の一人一人が前回よりも面白いものをと意識して進めていくと思います。一つ一つの企画も本当に個性豊かで、絵画もあれば彫刻のようなものもあったり、来場者が直に参加できるようなものもあったり。いろいろと楽しめるようになっていきます。ぜひみなさんに来ていただきたいです。

特集2
ART
にいがた
アートの世界へ
ようこそ



アートクロッシング2007にいがた 西区DEアート

■開催期間
10月13日(土)～28日(日) 10:00～18:00

■開催地
新潟市西区内野町～寺尾中央公園周辺

■問い合わせ
西区DEアート実行委員会
西区アートプロジェクト2007

新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学教育人間科学部 橋本研究室
TEL 025-262-7061 E-mail ni_art07@yahoo.co.jp
<http://www.ed.niigata-u.ac.jp/~ni-art07>

地域ともしっかりつながろう

かけはし隊が行く

地域とのつながりを通して考えたこと



学生ボランティア本部「ボランち。」(法学部2年) 近藤 彩野

私は、新潟大学学生ボランティア本部「ボランち。」に所属しています。「ボランち。」とは、2004年の10月23日の中越地震をきっかけに発足した団体であり、ボランティアコーディネートを中心として、学内、地域を問わずボランティアを扱っています。

私は、4月に内野小学校で愛桜会(あいおうかい)の方たちと花見の監視ボランティアをしました。ちなみに内野小学校の桜は、愛桜会の方たちが植えて、育ててきたそうです。

仕事内容は、木の枝を折る人や路上駐車で迷惑な止め方をしている人を注意したり、サッカーボールで遊んでボールをける人から他の花見をする人を守ったり、火を使っている人を注意して火事になることを防いだりなどです。

「楽しく花見ができるのはあなた達のおかげ」と言ってもらえたこともあり、この言葉をかけて頂いたときはすごくうれしかったです。お花見をしている団体からお菓子をもらったこともあります。

写真にあるのは、5月の下旬に内野小学校で行った「桜の肥料やり」の写真です。当日は雨が降っていたのですが、それにも負けずに頑張りました! 内野小学校の児童達と桜に肥料をあげる(直径30cm位穴を掘り、その中に肥料を入れて、土と混ぜる)作業をしました。思っていた以上に土が固くて大変でした。

花見の監視ボランティア・肥料あげなどの活動を通じて、桜を守っていくことの大変さを知りました。また、これらの活動は、自分にとって良い経験になったと思います。私は、普段から、積極的に地域に関わっ

ているというわけではありませんが、今回の活動を通じて、外に目を向けて何が問題なのか、とか、大学生だからこそ出来ることは何か? ということをも自分で考え、実行できる人になりたいと思いました。

来年も行おうので興味のある方は、是非参加してみてください。



●花見の風景



●愛桜会の方々と反省会



●桜の肥料あげ風景

ボランティアー



地域と結びついた学生生活を送る機会がたくさんあるのが、新潟大学の特徴のひとつ。

学内だけでは経験できないことが、みなさんをさらに成長させてくれるはずです。

地域と積極的に関わってきた先輩たちの声を聞いてみましょう。

私達にできること



大学院自然科学研究科2年 松元 淳

現在、私は、新潟大学が行っている地域貢献プロジェクトのひとつの「トキ野生復帰プロジェクト」に参加しています。佐渡島の小佐渡東部にある「キセン城跡地」と呼ばれる山中で、放棄された棚田を再造成したビオトープ群の調査を行っています。このビオトープ群は、トキ野生復帰の際の餌場として期待されています。私は、このビオトープ群の植物群落と水環境を調査し、今後のトキの餌場として利用する際の管理方法について研究しています。

私は、卒業論文を作成していた2年前からこのプロジェクトの中で研究を行っています。このプロジェクトには新潟大学だけでなく地元の人や多くのボランティア団体が参加しています。大学の中では、同世代の人たちとの関係が中心です。しかし、大学から一歩出ることによって世代を超えた新たな関係が生まれます。私も、このプロジェクトに参加し、地元の人やプロジェクトの参加メンバーなど多くの人と出会うことができました。また、調査の際は、大学が佐渡市から借りている宿舎で研究室の仲間や他の参加メンバーと共同生活を送っています。このような、参

加メンバーとの共同生活や地元の人と交流することで、新たな発見や、双方の理解を深めたりすることができます。そうした経験によって、自分が地域に貢献していることを強く感じることができます。

トキの野生復帰という同じ目標に向かって大学と地域が一緒になって活動することは、地域の活性化につながります。また、地域では、過疎や高齢化が進み「若い力」が不足しており、私達の地域貢献は大きな意味を持っています。「地域貢献」とは、私はどんな小さなことでもやることに意味があると思います。このような学生のときの様々な経験は、これからの人生において何物にも替えられない財産になると思います。

朱鷺



●キセン城のビオトープ群



●調査の様子



●宿舎での共同生活

雁木づくり活動から学んだこと



工学部建設学科4年 柳谷 理紗

工学部建設学科建築学コースでは、3年次の「建築計画演習」の授業の中で雁木づくりの活動が行われています。長岡市栃尾表町という雁木を特徴とする町に入り込み、グループに分かれ雁木のデザイン案のコンペを行います。そして町民の投票によって一位に選ばれたものが実際建設されます。私は3年次に高専から新潟大学に編入してきましたが、志望した理由はこの授業があったからでした。学校の中だけでなく人々と触れ合い地域を知りながら実践ができるのを楽しみにしていました。その上、一位を獲得でき建てられると決まった時の喜びは本当に大きかったです。

しかしながらコンペ案を考えるのも、実施案を詰めるのも想像以上の苦労が伴いました。普段の設計課題では気にしなかった構造の制約や、積雪や雪下ろしのこと、施主の要望を受けてどう提案するかということを考えねばなりません。またグループ7人の意見や考えを一つにしていくなかで難しさを感じました。実施に至るまでがさらに辛く、納まりや照明の位置など何度も模型を作り直し検討しました。そんな中であたたかく私達をもてな

してくれた町の方の笑顔があったことが喜んでもらいたい、より良いものを作りたいと頑張れる力となりました。

雁木を建て終えた今、住民の意見を聞いた後輩に説明したりすることで、この町に残り皆に語り継がれていくのだなと実感し、一つのデザインが与えるまちへの影響の大きさがわかりました。地域に出て活動することは相手があってこそで一人では完結しないことです。自分達の案をぶれることなく説明する能力、相手を説得させることができる提案力などの大切さを学ぶことができました。今回の経験は、

設計することの大変さと責任の重さを思い知り、設計を仕事にするかどうか悩ませる出来事にもなりました。しかしそれでもまちに合ったものを提案し、人々に愛されるものをつくっていきよう、これからも学んで行きたいと思っています。



●まち歩き

活動は5月に始まり、最初に住民と共にまちを歩き、その特徴や雁木について学んだ。写真の雁木は2つ上の代の学生によるもの。



●最終プレゼンの様子

9月に行われた住民に対する最終プレゼンテーション。住民の厳しい目が光る。

●最終プレゼンで施主と班担当のまちの方と一班に対し町を担当の方がおり施主の方と共に、意見をもらったり休ませてもらったりとお世話になった。(本人は前列左)

●完成した雁木

12月下旬に施工完了した。コンセプトは「おもてなしの雁木」。雁木と家との間を中庭と見立て、古材とアーチの組み合わせが中庭を包み込むよう計画した。



雁木

ミネソタでアメリカの医療を体験する



医学部医学科6年(当時) 池田 伸

新潟大学医学部は例年、米国ミネソタ大学の関連病院に実習生を派遣しています。この制度により、私は2006年、米国の医療を10週間に渡って体験する機会に恵まれました。

期間中3つの科を回りました。Hematology/Oncology(血液・腫瘍内科)、Rheumatology(膠原病科)、そして Infectious diseases(感染症科)です。実習の内容はとてここには書ききれません。当時のブログをご一読いただければ幸いです。実習の内容やミネソタの雰囲気が分かります(<http://kedas.cocolog-nifty.com/blog/2006/04/index.html>)。

この稿では、米国の医学教育・医療事情の特徴をいくつか挙げたいと思います。

米国の医学教育は極めて実践的です。学生といえども、独りで患者を診察し、過去のカルテや検査データも調べて患者の状態を評価し、さらに検査と治療のプランまで考えて指導医に呈示しなくてはなりません。現地の学生は当たり前のようにこなしています。

次に教育意識の高さです。Morning reportやnoon conferenceといった勉強会(無料で食事が出ます)が毎日のように行われます。学生教育はドクターの仕事の重要な一部であるという意識が浸透しています。

患者の社会的背景も様々です。英語が話せない患者も多く、病院にはスペイン語、ソマリ語、ロシア語などの通訳者が多数雇用されていて、必要ならすぐ呼び出せます。健康保険も日本と違って多様であり、無保険の患者もよく見かけます。保険内容に応じて適切な治療法や検査を選択せねばなりません。

新潟から、というより日本から遠く離れた地での実習でしたが、異国の地で生活しながら、ともかくもカリキュラムをまっとうできたことは大きな自信になりました。経験したことのない環境に飛び込むのは勇気のいることですが、それに見合っただけの収穫も得られると思います。在学生の皆さん、そしてこれから大学に入る皆さん、是非チャンスを逃さず、大きな一歩を踏み出してみてください。



●ミネアポリスの中心部を望む。

●通勤途中。下宿先からバスと電車を乗り継いで、30分程かかりました。



●実習先のHennepin County Medical Center (HCMC)の入口付近。4つのビルが連なる巨大な病院です。



●帰国の数日前、ミシシッピーの支流でカメラ乗りをしたとき。右から留学生3人(犬塚さん、井林さん、私)、留学の世話をしたミネソタ大学のDr. Watson、その娘さんです。



留学

最近増えてきている “こころの風邪”について

保健管理センター講師 豊岡和彦

皆さん、キャンパスライフを楽しんでいるでしょうか。大学時代というと楽しいことばかりの印象がありますが、社会に出る直前の時期でもあるので様々な課題もあります。例えば、①学業面では授業に出席して単位を取り卒業する、②進路面では専門領域を選択し、就職・大学院などの進路を選択する、③社会面では家族・友人・教職員と適切な人間関係を持つ、④心理面では自分が社会の中でどのように生きていくか模索する、などあげられます。このような課題に直面し、ストレスを感じ体調を崩す場合があるので注意が必要です。

ストレスの多い現代社会ではうつ病になる人が非常に増えています。2000年にWHOが行った調査では、うつ病はあらゆる疾患の中で、生涯有病率（一生のうちににかかる人の割合）は4位で、先進国ではいずれ1位になるだろうと予想されています（「こころの風邪」ともよばれる所以です）。ヨーロッパ、アメリカでの生涯有病率は15%前後といわれ

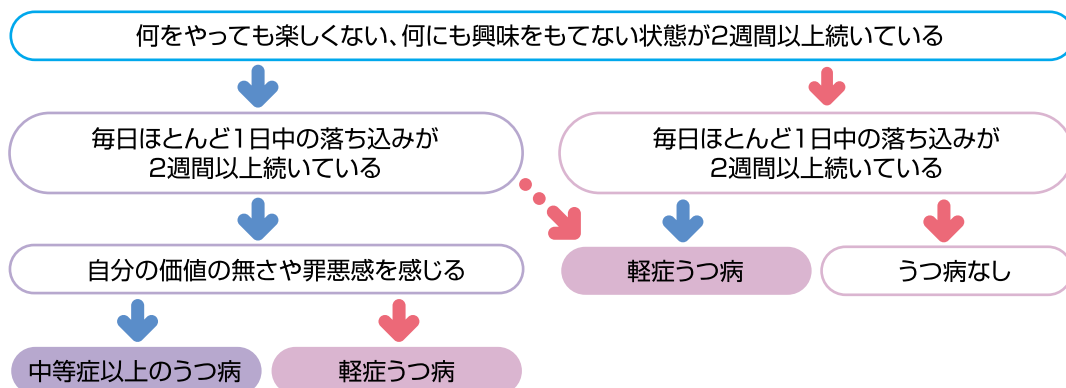
ています。日本では海外で行われているような大規模な疫学調査は行われていませんが、小規模の調査からは同程度と考えられます。また若い人ほどうつ病の有病率が高くなっていて、日本でもうつ病が増えてきていることを示す結果と指摘されています。

近年うつ病の『軽症化』がいられています。症状が軽いのは良いのですが、そこには落とし穴もあります。「自分自身でも果たして心の病気なのか癒け心なのか、はっきりしない」と本人は考え、第三者にもわかりにくい程度のため治療が遅れ、症状が遷延する事があるからです。

下の表は、東京大学心療内科で作成された最も簡便なうつ病スケールです。是非試してみてください。うつ病は薬により治療可能な病気です。下の表でうつ病の可能性があったら専門医の受診をお勧めします。貴重な学生時代を有意義に過ごせるよう願っています。

簡易うつ病評価スケール →YES →NO

「おっくうな感じが続いていますか？」



学務部からのお知らせ

学長による学生表彰式

平成19年3月20日、学術研究活動や課外活動において顕著な業績・成績を挙げた学生個人または団体を讃える学長表彰式を実施しました。

この表彰は、新潟大学学則・大学院学則の規定に基づき、特に重要な表彰について学長が行うもので、今回表彰を受けたのは、学術研究活動で個人表彰2件、課外活動で団体表彰2件の計4件で、個人及び団体の代表者一人ひとりに長谷川学長から表彰状と記念品が授与されました。

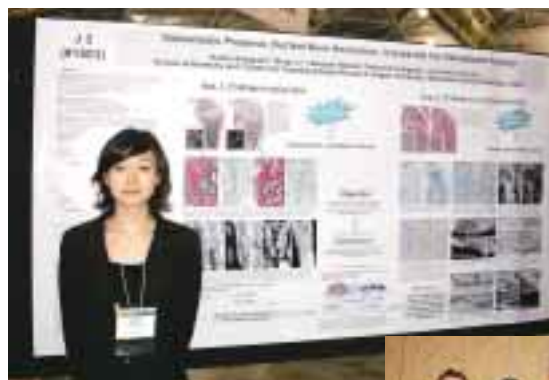


● 受賞者の声

学長による学生表彰を受賞して

歯学部歯学科6年 坂上直子

2006年、オーストラリア開催の国際歯科研究学会においてハットンアワードジュニア部門の日本代表として、同学会のトラベルアワードを受賞しました。今回このことに対して学生表彰をいただき大変嬉しく思っております。私の研究のテーマは、骨芽細胞の機能活性に対して破骨細胞が与える影響です。学部3年の頃より骨に異常の認められるマウスと正常マウスを光学・電子顕微鏡を用いて骨の細胞と石灰化の程度を観察し比較検討してきました。研究を続けてきた中で、その全てが自分の糧となっており、基礎研究で得たものは、将来歯科治療に携わる際にも役に立つものと信じています。これからも自分が日々成長できるようにチャレンジする前向きな姿勢を持ち続け、何事にも努力したいと思っております。今回の表彰は、多くの先生方にご指導していただいた賜物であり、お世話になった方々に感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。



学会会場にて



トラベルアワード表彰式

トラベルアワード表彰式にて
マレーシア代表の学生と

● 受賞者の声

地球からの贈り物

大学院自然科学研究科2年 寺 部 和 伸

「カン、カーン!」

山深い谷間の斜面にはりついて、私はハンマーを振るっていた。2003年の秋のことである。その時、見慣れない化石が目飛びこんできた。

「なんだろう?…カニの甲羅かな?まあ、取り敢えず持っていくか。」これが、後の新属新種の発見となる“ニッポノポン・ハセガワイ”との出会いであった。

その後、この化石のクリーニング作業をおこない、カニ化石であることを確信した私は、甲殻類化石の専門家である柄沢博士に連絡を取り、柄沢博士と加藤博士の同定により未記載種であることが判明した。生物学的な記載を両博士が、産出した地層や年代特定を私が担当し、共同研究という形で2006年に国際誌で正式に発表した。

1つの化石は小さなものであるが、それらには時代や環境を推

定したりと、膨大な情報を含んでいる。今回の化石も1億3000年という時を経て、私たちに多くの発見を与えてくれた。いわば地球の贈り物である。



調査中の一コマ

ニッポノポン ハセガワイ
タイプ標本

● 受賞者の声

仲間と共に歌う喜び

新潟大学合唱団(教育人間科学部3年) 宮 崎 翔 多

昨年度、全日本合唱コンクール全国大会にて、部門一位の金賞・熊本県教育委員会賞を受賞しました。私たちは長年コンクールに出場して来ましたが、昨年初めて全国大会へ駒を進めることが出来ました。初めての大舞台に戸惑いながらも、顧問の松浦良治先生、外部講師の先生方やOBの方々など多くの方々の支えの下で自分たちの出来る精一杯の演奏をし、そして演奏を大いに楽しもうと団員が一丸となったことが今回の素晴らしい賞につながったのではないかと思います。

今年度のコンクールでは、シードによって全国大会への出場が決まっています。昨年度金賞を受賞した合唱団として恥ずかしくない演奏が出来るように気を引き締めつつも、音楽の好きな仲間と集い、共に歌える喜びを噛みしめながら日々活動していきたいと思っています。



第59回全日本合唱コンクール全国大会 2006. 11.25 熊本県立劇場

● 受賞者の声

逆境の中での金賞

新大室内合唱団(人文学部4年) 渡 部 知

私たち新大室内合唱団は、平成18年の第59回全日本合唱コンクール全国大会大学A部門で金賞を受賞しました。A部門は32人以下の少人数での合唱の部門です。新大室内合唱団は少人数での繊細な合唱を目標にして活動しています。私たちは、平成17年の第58回全日本合唱コンクール全国大会では銀賞を受賞しました。そこで次の目標として全国大会での金賞を目指し、練習を重ねてきました。昨年はそれまで利用していた練習場所がほとんど使えなくなり、新たな練習場所を探しながら、落ち着かない状態で練習をしていました。しかし、そうした不安定な状況の中でも団員は曲作りに集中し、指揮者の箕輪久夫先生の指導の下、練習にはげみました。課題曲のF.グレロ作曲Sancta Mariaと、自由曲のP.コスティアイネン作曲Gloriaは、この年の思い出深い曲になりました。このときの気持ちを忘れずに、今年も活動していきたいと思っています。



2006年11月25日熊本県立劇場にて



学業等成績優秀者奨学金授与式

平成19年4月26日、入学試験成績優秀者及び年間学業成績優秀者に対する奨学金授与式を実施しました。

この奨学制度は、優秀な学生の確保、在学生の更なる学業成績の向上と活力の醸成を図ることを目的として、昨年度から新たにスタートした本学独自の制度であり、各学部(医学部は学科)の入学試験成績上位者30人、各学部・学年の年間学業成績優秀者102人に奨学金が授与されました。中には昨年度に引き続き授与された者が相当数おり、同制度の導入による、更なる成果が期待されています。

授与式では、長谷川学長から、賞状と奨学金目録が各学部等の代表者に渡され、「今後も、自発的・積極的に学ぶ姿勢を堅持し、自己の完成を目指して、更なる研鑽を積み、他の学生の模範となり、さらに牽引していくよう期待します。」との挨拶がありました。



編集後記

新潟大学に入学すると、どのような新しく面白い世界に巡り会えるのか。学生のみなさんが期待するのは、きっとそのことでしょう。そうした熱い期待に応えるべく、大学とスタッフは、今までにない有意義な試みを次々と実行に移しています。超域研究、革新的な授業・ゼミ、地域との連携が生み出す大きな成果。本号の特集のなかに、みなさんの興味・関心をかきたてるものが必ずあるはずです。ぜひご一読下さい。

●編集委員長 石坂妙子

特集2「アートプロジェクト」の編集を担当しました。教育人間科学部の丹治嘉彦先生に「うちのDEアート」の概要をうかがった上で、いま中心的に活動しておられる山本先生と上林さんを紹介して頂きました。お二人への聞き取りの中で、たくさんの学生と市民が参加するプロジェクトを運営するご苦労と、それをを超える大きな楽しさの双方が伝わってきました。活き活きとしたお話の連続で、爽やかさの残る取材でした。

●編集委員 芳賀健一

今回研究教育最前線特集号として、平成15年に新潟大学に、新しく設置されました超域研究機構について、医学部と工学部とにわたって活躍されている大森豪先生に活躍内容をご紹介いただくことができました。また医学部学生池田伸さんには米国ミネソタ大学関連病院における10週間にわたる臨床実習経験談を、歯学部学生坂上直子さんの国際学会発表に対するアワード受賞談を寄せていただきありがとうございました。

●編集委員 柴田 実

2つの特集を通じて、「キャンパス・ライフの新動向」とでも言う学生生活の一面を読み取っていただけるでしょうか。大学生の生活は、もちろん勉強だけではありません。勉強以外の学生生活というと、部・サークル活動、アルバイトが、思い浮かぶかもしれませんが、それだけではありません。大学の勉強を生かして、学外へ出て、アートを作り、棚田を作り、雁木を作る。こんな学生生活を送ってみませんか。

●編集委員 寺尾 仁

広報委員会第1部会

部長・編集委員長

石坂妙子(教育人間科学部)
ishizaka@ed.

委員

田中拓道(法学部)
takujit@jura.

芳賀健一(経済学部)
haga@econ.

竹内照雄(理学部)
takeuchi@math.sc.

柴田 実(医学部医学科)
mshibata@med.

五十嵐敦子(歯学部)
atsuko@dent.

加藤大介(工学部)
dkato@eng.

末吉 邦(農学部)
sueyoshi@agr.

井村哲郎(大学院現代社会文化研究科)
imurat@human.

寺尾 仁(大学院自然科学研究科)
terao@eng.

横山峯介(脳研究所)
myoko@bri.

田口 洋(医歯学総合病院)
yo@dent.

馬淵憲治(学務部長)
kmab@adm.

事務局(学務部)

TEL 262-6309 FAX 262-6304

E-mailのアドレスは、
niigata-u.ac.jpの標記を省略しています。

■新潟大学ホームページ <http://www.niigata-u.ac.jp/>

新大広報 Back Number http://www.niigata-u.ac.jp/gakugai/pr/c_forum/

新大広報のバックナンバーは上記のURLから見るができます。また、学務部学生支援課で受け取ることもできます。



新潟大学広報誌

Niigata University
Campus Magazine

新大広報

No.165

2007 夏号

編集・発行／新潟大学広報委員会・新潟大学学務部
印刷／株式会社第一印刷所